G-4　多賀城市八幡地区　　2011 年 11 月 22 日（火）

報告者名　赤尾　智宏　　被調査者生年　1938 年（男）
調査者名　菊地　　暁　　被調査者属性　元多賀城市議会員、鹿踊保存会員
補助調査者　赤尾　智宏

話者情報

話者は、昭和 13 年、中谷地出身。戦前からの生業である農業に加えて、戦後新たに造園業を営んできた。平成３年から今年の９月 10 日に辞職するまで、多賀城市議員として市政に従事した。自身の生涯に深く関係している地域の歴史に精通している。

話者の母は、大正４年、利府市沢乙出身、16 歳のときに嫁として中谷地に来た。結婚後５年間子宝に恵まれず、当時は子どもができないと嫁に実家に帰ってもらうというような風習があったのだと話者は語る。

話者の曾祖母は、一番の地主である下谷地の田口家と同様に名字帯刀が許された 400 年以上続く話者家の本家の長女であった。話者家は女性であると言う理由で家督は継ぐことが出来ず、別家に出された話者の曾祖母が初代となり、現在、話者で４代目である。

地域史と話者のライフヒストリー　戦前・戦中〜現代

昭和 16 年に海軍工廠建設のために住居地の強制撤収の準備が始まった。話者は 4、5 歳に満たなかったが、住居地移転について「強烈な記憶がある」と戦前・戦中の八幡地区の歴史を語り始めた。土地の強制買収が決定したとき、国民尋常小等学校（後の多賀城小学校）に集められて、当時の後藤一義村長によって配布された住民の土地を買収するという書面を話者は保管している。ある日、朝鮮人の囚人 30〜40 人がトラックに乗せられて、屋敷の周りに降ろされるのを見た。移転前の話者の屋敷は、イグネと畑に囲まれていた。青い服を着ており、見た目で囚人だと分かった。刑務官の指示で、その囚人達によって屋敷の周りにあったイグネの林に１月から２月頃に火を付けられた。話者は、子どもの頃にイグネで裸足のままで遊んだ記憶がある。裸足で家に上がると、話者の曽祖父から「エゾみたいだ」と言われた。裸足で家に上がることをそのように表現することについて、「差別的に聞こえるかもしれないが」と何度か前置きをしながら話した。

住居地の他に馬が没収され、父、父の２人の弟が徴兵された。高崎の化度寺の近くに住んでいたＡ氏は、役場の赤紙の配達人だった。当時、Ａ氏が家に来ると赤紙が配達されるため、どこの家に行くのか気になり、自分の家には来ないでほしいと感じていた。配達するときのＡ氏の表情は、本当に申し訳なさそうだった。「お国のために」と赤紙を受け取っていたが、「心で泣いて顔で笑って」という気持ちだった。話者の父は、新潟の予科練隊に入隊し、出征先はフィリピンだった。そのような状況下で、鹿踊は出来る状態ではなく、戦中に途絶えてしまった。移転後に家を新築するため、話者の母と姑が手作業で土の山をツルハシで削り、田であった場所に

土を運んだ。ワラを束にしたものを田に敷いてから土を盛る作業は、馬などを使っても 40〜50 日をかかった。そして、作った土台の上に家を建てたが、建材が足りない箇所があったため、代わりにワラを使用することもあった。話者の母は、家の建設から田畑までどんな仕事でもやったと語る。

戦後の話者の家族構成の変化として、父の戦死に伴い、三男であり戦争から生きて帰郷した話者の叔父が、家を守り、一人前に父の子どもを育てるということで再婚し（ツギエン）、話者の義理の父となった。話者は多賀城市議員に選出されたことがある。話者は戦後に国に借り入れられていた自分たちの土地で農家を続けた。一方で、話者は、B 氏や C 氏と都市近郊の農村の在り方について考える４Ｈクラブという組織に所属していたこともあり、新たな農家の在り方について考えていた。そのなかで、農閑期には塩竈の先生に弟子入りし、20 代後半から造園業を始めた。後に造園業の会社である東広園を B 氏と 2 人で開業した。戦後の農家は、財産の使い方によっては浮き沈みがあった。財産の全てを農地購買に使わずに、農作業をやる一方で電気屋を経営した D 氏のような農家もいた。東部は農地への関心が高いが、農地が減ることのなかった西部は東部ほど関心が高くない。戦後の多賀城は東部の人が引っ張ってきたと話者は語る。

戦後の多賀城の産業の変化として、宮城県知事三浦義男が任期中に、住居地が海軍工廠の建設地として強制撤収された経緯が考慮され、5 年間法人税無税などの工場誘致条例で東京通信工業が誘致された。話者と同級の中学卒業者からソニーへ入社するようになり、昭和 15 年生まれの話者の弟もまた、ソニーへ入社した。弟は、テープレコーダーを製造していたが、炉での燃焼作業でベンゾールの中毒にかかり、一夜にして命を落とした。工場での事故の訴訟が起こり、話者の母は、裁判で裁判官の前に座って証言をした。「何にも悪いことはしていないから、少しも怖くなかった」と母は当時のことを語る。弟を亡くしたことは、話者と母の両者にとって辛い、苦い体験であり、ソニーを見たくないという時期もあった。しかし、今年 3 月の東日本大震災を受けてソニーが多賀城での事業を縮小する流れにあったとき、「生まれてきた町を何とかしたい」という思いから、東京の本社まで重役達に談判に向かった。重役達の前で故郷に対する想いを話し、その想いは受け入れられたと話者は感じている。

3 月 11 日の震災では、末の松山に伝わる「コサジ物語」同様に津波で船が近郊の川まで流されてきた。「コサジ物語」とは、酒をごちそうしてもらったショウジョウ（狸）が、酒屋の娘であるコサジに自分が殺されるとき、西の空が真っ暗になり大水が来ることを恩返しとして知らせるという物語である。ショウジョウを殺して洗ったと伝えられている沼、「鏡ヶ池」、「ショウジョウヶ池」は現在でも残っている。

移転以前の中谷地鹿踊について

以下で記述する移転以前の鹿踊に関する情報は、話者が話者の祖父から伝え聞いたものである。祖父は、多賀城村役場の固定資産調査員を歴任し、移転前の家の囲炉裏を囲んで昔話などを話者に話して聞かせた。祖父は、世話好きな人間だった。話者自身は移転以前に鹿踊を実際に見たことはない。

鹿踊は、「門褒め、庭褒め、館褒め」と唄にもあるように新築などの祝いごと、祭などの機会に行われた。鹿踊を舞う機会である「祝いごと」の具体的な内容については、新築以外にはわか

らない。鹿踊には五穀豊穣を祈願する意味もあり、秋の祭にもやっていた。祭の会場は萩原神社であり、以前は 9 月 15 日が祭日だったが、現在は第 1 日曜日である。萩原神社と喜宝印様の二つの宗教施設は、それぞれ別個の施設であるが、どのような関係にあるかは分からない。中谷地以外では、鹿踊を金華山に奉納したこともある。

鹿踊以外に、カカシマイを踊る人がいて、その人のことを話者は「道化師」と表現した。カカシマイは、当時は「何のレクレーションもなかったため」、楽しみの一つとされていた。構成は、鉄砲打ちに親鹿が打たれて、子鹿が親鹿の死を悲しむとなっていた。また、鉄砲の弾を男性器に見立てるような踊りもあり、現代には合わないため行われなくなった。移転前の鹿踊から使用していた太鼓、締太鼓があったが、それが何かわからずに話者も D 氏も遊んで壊したことがある。

祖父は、鹿踊の今で言う「マネージャー、まとめ役」だった。鹿踊の踊り手は全て農家であったため、農繁期など踊り手がそろわない場合は、祖父の判断によって鹿踊演舞の依頼を断ることもあった。D 氏の父は、踊り子の中でも年齢が若い方であった。D 氏の母の嫁ぎ元は塩竈市の母子沢（大日向）にあるが、その家の本家の E 氏は鹿踊の「中心人物」であった。E 氏の息子たちは亡くなっているが、彼らも鹿踊に関っていた。鹿踊を踊るのは夫であり、鹿踊を奉納するために中谷地を離れるときは妻が農作業など、雑事の一切を行った。話者の母は、農作業の仕事が大変だったと語る。母が嫁いでできたときに鹿踊が行われていたかどうかは確認できていない。中谷地の鹿踊の由来は、宮城県富谷町赤石部落から伝わったとされている。E 氏が自ら出向いたのか、赤石部落の方から中谷地に伝えに来たのか、伝えられた経緯について詳細は明らかでない。鹿踊のルーツは江戸時代より古いのではと話者は考えている。

鹿踊の復活と鹿踊保存会の現況

多賀城 2 代目市長伊藤喜一郎のときに、多賀城市にかつてあった伝統芸能である鹿踊を復活させることになり、鹿踊保存会が設立された。大場正七が、鹿踊保存会の初代会長である。昭和 56 年に芸能道場が建てられ、道場の側には鹿踊の由来を記録した碑がある。話者は、鹿踊復活の際に、現存している赤石部落や秋保の鹿踊を見学に行ったことがある。途絶える以前の唄は、主に石橋久作によって復元が進められた。久作は、話者の祖父より 10 歳ほど年下で、話者の祖父のことを「あんつぁん」と呼ぶ間柄だった。D 氏の父が一番踊りについては覚えていたはずだが、病気をしてしまい何一つ覚えていない。仙台市中野栄在住である F 氏は、一番若い踊り手であったが、やはり以前の踊りを覚えていなかった。そのため、宮城フィルハーモニーの指揮者片岡良和さんの妻、籾江道子先生に新たに踊りを創作してもらい、バレエ教室で習った。現在の鹿踊は、「10 割」が籾江先生によって作られた。鹿踊の衣装は、昔の記憶から再構成し話者の長男をモデルに衣装を作った。話者の母は生地となる仙台地織りを買いに行くなど、衣装作成に関った。鹿踊の被り物に多賀城市の市章を入れる創作を施した。着るシャツは野良着（ハダコ）であり、下はモンペをはいていた。現在、長男は保存会には入っていない。

保存会の年間の活動は、初夏のあやめまつり、万葉まつりが主な機会となる。昨年の 2 月 6 日、今年の 5 月 22 日には友好都市である奈良で鹿踊を披露した。市行政から保存会会長宛に依頼文書が届き、公的な場や対外的な場への出演が要請される。現在の会員数は、議長を辞めた話者が新たに加わり 13 名となった。多賀城市からの鹿踊、多賀城太鼓への補助金は、50 万から 20

万へと縮小された。保存会会員は、中谷地外出身者が６名である。笛２名、唄１名、太鼓１名、残りの９名が踊り子を担当する。